視農事　　　　　　　　　　　　山本　祐司

【本文】前村俶戴太怱忙　耕地决渠無敢遑　手把犁鋤水澤澤　身披襏襫雨浪浪

男勤農業不違節　女唱田歌耐捕秧　聞説頃年年穀熟　秋成須有極民望

【書き下し文】前村に載（こと）を俶（はじ）めて太（はなは）だ怱忙（そうぼう）たり　地を耕し渠（みぞ）を决（き）って敢（あえ）て遑（いとま）あること無し　手に犁鋤（れいじょ）を把（と）って水は澤澤（たくたく）　身に襏襫（はっせき）を披（き）て雨は浪浪（ろうろう）　男は農業を勤めて節を違えず　女は田歌を唱て秧（おう）を捕むに耐えたり　聞説（きくならん）頃年（けいねん）年穀（ねんこく）熟すと　秋成（あきのみのり）須らく民望を極むるあるべし

【現代語訳】住居である詩仙堂から下の村を見ると、田植えが始まって忙しそうである。田を耕し、溝を切って、忙しいなどと言っている暇はない。手にスキを持ち、牛にスキをつけ、田を耕し、田植えの準備をすると、いい具合に水がザザーッと入ってくる。待っていた雨だ。蓑笠や雨具をかぶって雨の中で田植えだ。男たちは農業の季節を誤らず、女たちは田植歌を歌って苗を植える。聞くところによると、このごろは豊年続きだとか。きっと秋には豊年満作となるであろう。

【コメント】安城市出身の石川丈山の漢詩。丈山が住居とした京都の詩仙堂の近辺の農村の風景を詠んだものです。昨秋に開催した書道実演で書いたこの漢詩を、行書と草書を交えて、条幅形式の作品に仕上げました。